第九話＜“U”の本当の顔＞

A 氏はわたしより二つほど若い当時１８歳か１９歳だったと記憶している。顔は映画俳優になってもおかしくないようなイケメンで、足もすらりと長かった。業界では年齢に関係なく先に入った人には絶対的な権威が与えられるようで、わたしもたびたびそのことに戸惑った。しかしA氏はわたしの先輩であっても威張ったようなところが全然なく事務所が違っていたせいもあってか撮影が終わって一緒に風呂に行くと、二人の体にこびりついた風呂の底に溜まったセメントの粉をすくい上げては笑いあったものだ。

ひょっとして、そのとき A 氏の漏らした「とてもじゃないですけど一分はもたないですよ…だったのかもしれない」

セメントの粉は撮影中の爆破シーンで飛び散る粉じんとして使われた。また戦闘機から打ち込まれるミサイルは打ち上げ花火のようなもので怪獣にぶつかったあと火花となって覗き穴の中へ飛び込んでくるが小さな火傷など気にしてはいられない…特撮の現場で自分の都合でシーンを止めるなんて考えられなかった。目に入る火の粉さえ防げれば後はへっちゃらなんとかなるさ！そんな勢いで撮影はどんどん進んでいく。

怪獣は“U”の三倍ほどの出番があるため、わたしは殆ど毎日撮影所通いだったように思い出す。

一度、“U”の撮影中だったろうか、ほかのスタジオで学園ものの撮影をやっていたわたしの高校時代の憧れ、中村雅俊氏と食堂のテーブルで向かい合わせになって挨拶したのを思い出す。氏はカツ丼とカツカレーか何かを平らげていた。

わたしが携わらせて頂いた約三ヶ月の間の“U”の撮影の中で毎日毎日遅くまで、閉ざされたスタジオの中に籠もって埃と汗と涙にまみれて仕事に打ち込むスタッフの熱意とはいかなるものだったのでしょう。

あの、茶の間からは想像もできない過酷な現場で生み出されていくものこそ、僕らが少年の頃に憧れた“U”の魅力の神髄なのかもしれないと、時が経つにつれ思うことです。

今だからこんなに楽しく語れるということもありますが、しかし今になっても忘れられない暗い蔭もあります。それは、“U”に入った人たちは代々心臓に掛かるあまりの負担に耐えかねて降板していかなければならない、と聞かされていたことです。わたしが芸能界を去って数ヶ月後“U”の中身が A 氏ではないことが分かりました。その真相は推測に過ぎませんが、もしわたしがその中身であっていたら、同じことになっていたかもしれないという思いは重く、

しかしそこから逃れようとも、思えなかったに違いありません。

　そうなると分かっていても避けることのできないことがあるのだと思います。しかしそれがその先どのような出来事に繋がっているかなんて識ることは誰にもできないことなのです。…とは、今つくづく思うことです。